「オリジナルブレンド」角川春樹さん推薦原稿

イギリス人は揺り椅子に坐って、スコッチ・ウィスキーを飲みながら、ビステリーを読むのが人生の楽しみ方だ。

だが、私は美味しい珈琲を飲みながらの読書が至福の時だ。

好きな珈琲は、人それぞれに好みがある。私はこれまで珈琲にミルクを入れずに、やし砂糖を加えていたが、広島の尾道にある本屋さんの会長から贈られたグアテマラ・ブランドに・インドネシアの絶妙なブレンドを口にして、初めて砂糖抜きの珈琲の美味しさに目覚めた。

芳醇な香りとゆずかな甘みがあり、一滴余さず飲み干した。本を読み編集するのが私の職業だが、私の人生に新しいパートナーが加わった。この珈琲に次の一句を捧げたい。

花冷えや読書にかなふ珈琲欲る

角川春樹

角川春樹

10×20

「マイルドブレンド」阿川佐和子さん推薦原稿①

ようやく私は大人になった

子どもの頃、阪田寛夫作詞の「おとなマーチ」を聴いてコーヒーの魅力に思いを馳せた。

なりたいなりたい　なりたいなりたい

おとなになりたい　たい！

おとなになったらコーヒーをのんじゃう

ガッポガッポのんじゃう

大人に憧れる少年の歌である。すっかり大人気分になっているけれど、ところどころに子どもの本性が表れる。いつもコーヒーを飲むときは「牛乳入れて飲みなさい」と親に言われているから、大人になったら牛乳なんか入れるまいと少年は心に誓う。そのくせ砂糖はぽかぽかぶち込みたいのだ。

この歌を聴いて、私は合点した。なるほど

コーヒーとは、牛乳も砂糖も入れないのが大人の飲み方なのだと。ところがなかなか大人

阿川佐和子

「マイルドブレンド」阿川佐和子さん推薦原稿②

になれなかった。コーヒーを注文するとき、「ミルクとお砂糖はどうしますか？」と訊ねられるたび、「うーん」としばし考えて、結局、「両方ください」とお願いしてしまう。子ども時代のコーヒー牛乳からなかなか卒業できなかった。

でもあるとき発見した。尾道の啓文社という本屋さんが作ったマイルドブレンドを飲んだ瞬間、私は仰天した。本当においしいコーヒーに出合うと、ミルクも砂糖も入れる気にならない。ストレートでもするりと喉を通り、香りが鼻の奥に広がり、すうっと心が落ち着く。気に入りのカップに満たしたマイルドブレンドの清々しく品のある香りに何度も鼻を近づけて、私はやっと、本当のコーヒーを味わえる大人になった気がする。遅すぎますけどね。

「ハードボイルドブレンド」北方謙三さん推薦原稿①

ハードボイルドは、どこか甘い

北方謙三

コクヨ　ケ－70　20×20

「ハードボイルドブレンド」北方謙三さん推薦原稿②

私の現代小説で、登場人物は酒を飲んでいることが多い。それを書いている私は、深夜の酒を除いては、ほとんどコーヒーを飲んでいる。だから、コーヒーにはずいぶんとこだわった。それを語るとキリがない。一時は、このコーヒーにはこのカップ、と決めたりしたものだ。いまは、カップはそこにあるもの。コーヒーは何種類かのお気に入りがあればいい、という対し方である。自然体になったのだ。それで、香りと味を、より率直に愉しむようになった気がする。

飲み方に特別なものがあり、塩をわずかに入れるのだが、これは、滅多にやらない。入れたくなるものが、限られているのだ。ハードボイルドに、塩を入れてみた。苦味の中で、塩が微妙な甘さになるべきではないか。予想以上であった。それ以来、それが執筆中のコーヒーブレイクの、私の愉しみになった。特別なやり方で飲んでいる。そう思うと、ハードボイルドが友だちになった。

コクヨ　ケ-70　20×20